

セルフナラティブとエンパワーメント

日記／自己表現／ケア

荻野亮一（慶應義塾大学社会学研究科）

セルフナラティブとエンパワーメントにまつわる言説の現代的展開に先鞭をつけたのは、おそらく、ホワイト、エプストンらによって整理された、家族療法にルーツをもつ心理療法、ナラティブセラピーの理論であっただろう。その後、ナラティブにまつわる言説は多様な展開をみせ、現在では人文社会科学の幅広い領域で、いわゆる「ナラティブアプローチ」に基づいた研究が進められており、社会学の分野においてもライフストーリー研究や生活史研究などの実践は、セルフナラティブにまつわる諸研究と密接な関連をもっているといっている。今回の発表における、発表者の関心は主に2点に集約される。

第一に、エンパワーメントと結びつけて考えることのできるようなセルフナラティブの営み、自己語りの実践において語る「私」とはどのような存在なのか、という問いについて考えてみたい。社会構成主義の理論を援用するまでもなく、自己語りを遂行する「私」が一側面において、関係論的な自己であることは確かなのだが、しかし、むしろ、ときにそのような諸関係の内に位置付けられた自己という自己イメージは、エンパワーメント、あるいはケアのはたらきを阻害することがある。むしろ、関係論的な自己を諸関係に向けて解き放った後にもなお、その場所に残り続ける消去不能な、いわば私の存在する根拠、存在の原事実としての〈私〉こそが、まさに、いま、ここで生きづらさを抱えて暮らす主体の定位する地点であるのだと、ここでは考えたい。だとするならば、私たちは、語りを通じたエンパワーメント、ケアの実践を考えると、そのような〈私〉に基づいた語りの遂行を促進する必要がある。

このとき、いわゆる日記が〈私〉に基づいた語り、セルフナラティブをどのようにたすけるものであるのか、分析し、考察することが、本発表の第二の主題である。現在、ブログにはじまり、SNSの投稿に至るWEB上における日記の発表も盛んに行われているが、本発表では、あくまでも私的な領域で発表を前提せずに書かれた日記、いわば「クラシック」な日記を取り上げて、日記とセルフナラティブ、そしてエンパワーメントの可能性について探究を進めていく。具体的には、高野悦子『二十歳の原点』、金鶴泳の遺稿の一部として残された「日記」などが参照されることになるだろう。高野も金も共にそれぞれの課題を抱えながら、悩み抜き、そして日記を書き続けた人物である。彼らにとっての日記の意味は、そして、日記をつけるとは、どのような意味を持つ行為だったのだろうか。

以上のような2つの関心に基づき、本発表では、自己表現としてのメディアとしての日記におけるセルフナラティブの遂行とエンパワーメントの関係を明らかにし、従来の心理学の領域における日記療法の研究以上に、日記という文化的実践の持つ意義と可能性を考えたい。